

富良野市の産業の移り変わりと これからの展望について

北海道教育大学旭川校 教育学部 生涯教育課程 コミュニティ計画コース

2420

瀧上 亮

目次

はじめに

1. 富良野市の歴史と現況

1-1. 概要

1-2. 歴史

2. 産業

2-1. 農業

2-2. 商工業

2-3. 観光業

3. 主要な観光地の実態

3-1. ふらのワイン工場

3-2. ふらのスキー場

3-3. ドラマ「北の国から」による観光実態

3-4. 「北海へそ祭り」

4. これからの展望

4-1. 定住者の呼び込み事業の今後の可能性

4-2. 長野県営平にみるスポーツによるまちおこし

5. 研究の成果と今後の課題

おわりに

はじめに

今日、あらゆる市町村で個性的な「まちおこし」が進められているがテーマパーク建設や大企業と協力しての地域振興活動は頭打ちのケースも少なくない。その中で地域の個性を活かした、お金のかからない活動の重要性が指摘される。こうした視点から富良野市の歴史を考えると、現在の主幹産業の多くが、住民の努力の成果である。

現在の富良野市を支える産業は農業、観光業である。しかし、ドラマ「北の国から」「優しい時間」が終幕を向かえた今、新たな「まちおこし」が必要とされている。

こうした富良野市の現状を乗り越えるために、本論では「富良野市の歴史」を振り返るとともに、他市町村の成功を納めている「まちおこし」「まちづくり」に着目し、富良野の地域性を活かした事業や新たな産業の可能性について検討する。

1章では、富良野市の地勢、気候また地域の特徴、また人口の推移や産業別人口などについて述べ、開拓からの歴史を振り返る。

2章では、富良野市の産業について着目し、農業、商工業、観光業について触れる。富良野市は古くから農業のまちとして栄えてきたが、「富良野スキー場」の建設やドラマ「北の国から」の放映などによって農業＋観光業のまちとして発展・成長しているし、産業の形態も以前に比べ大きく変貌を遂げている。その事も踏まえて2章では、多角的に検証していく。

3章では、3つの観光スポット、1つのイベントについて取り上げる。自治体が積極的に事業の経営・運営に関わっているという形態から見ても、富良野市では珍しい事業形態を取っている「ふらのワイン工場」、富良野市では、唯一の国際的なスポーツ施設である「富良野スキー場」、全国に富良野市の名を轟かせることになるドラマ「北の国から」に見られる観光産業、富良野市独特のお祭りである「北海へそ祭り」について、今後の課題や改善すべき点などを考察する。

4章では、富良野市が行なっている本州からの定住者の呼び込み事業についての課題とこれからの展望について述べるとともに、長野県菅平にみるスポーツによるまちおこし事業を菅平と富良野市を多角的に比較するとともに新たなまちおこしの可能性として「合宿誘致」を提案し、富良野市の合宿地としての魅力や課題を見出していくこととする。

5章は、研究の成果と今後の課題を挙げ、研究の総括とする。

1. 富良野市の歴史と現況

1-1. 概要

市名の由来は、アイヌ語「フラヌイ」（イオウくさい火炎の土地の意）から、転化。十勝岳の噴気の臭気によるとされる。

1-1-1. 地勢

富良野市は、上川支庁管内の南部に位置し、北緯 43 °、東経 142 °、東西 32.8km、南北 27.3km で北海道のほぼ中央にあり富良野盆地の中心都市である。総面積は、600.97 km²（平成 15 年 10 月 1 日現在）で東方に大雪山系十勝岳、西方に夕張山系芦別岳がそびえ、南方には千古の謎を秘めた天然林の大樹海（東京大学演習林）があり、市域の約 7 割が山林という恵まれた自然状況にある。

1-1-2. 気候

気候は、北海道の内陸部で大雪山系と夕張山系に囲まれた地形のため、典型的な大陸性気候である。気温の日較差や年較差が大きく、夏季には集中豪雨の傾向もみられ、降雪期間は 11 月中旬から 4 月上旬までで、積雪深は 1m 内外だが、山間部では 2～3m に達する。平成 11 年の年平均気温は 6.8℃で、最高気温は 34.1℃、最低気温は -25.5℃、年間日照時間 1,418 時間、年間降水量 1,192mm となっている。

特徴

富良野市は、北海道の中心標が立ち「北海道のへそ」に位置する。基幹産業は複合経営を主体とする生産性の高い農業で、付加価値をつけた農産加工の振興によって発展している。チーズやジャム、アイスマイルク、手作りハムやソーセージ、ぶどう果汁や（酒）ふらのワインなどの特産物がある。また、「ふらのスキー祭り」（2 月）、「麓郷ラングラウフ」（3 月）、「北海へそ祭」（7 月）、「ふらのワイン・ぶどう祭」（9 月）には、市外からも多くの人々が訪れ、さらにラベンダー、ドラマ「北の国から」「優しい時間」で有名な麓郷の森、ニングルテラス、スキー場など年間 200 万人を超える観光客が訪れる。00 年には「富良野演芸工場」を開設。地域に文化活動を広く根付かせ、文化活動への積極的参加を促し、市民の自主的創造活動を支援して、地域の活性化を図るとともに、新たな市民のアイデンティティを確立し、魅力あるまちづくりを進める。

また、東京大学演習林の試験林の広さは日本一を誇り、四季折々に鮮やかな彩を魅せる。

1-1-3. 人口と世帯数

富良野市でも北海道の多くの市町村で見られるような少子高齢化が進行している。

表 1-1. 富良野市の人口

	平成 12 年	平成 16 年
人口総数	26,252 人	25,452 人
男	12,528 人	12,115 人
女	13,724 人	13,337 人
年齢別構成		
0～14 歳	4,067 人 (15,6%)	3,687 人 (14,5%)
15～64 歳	16,480 人 (63,1%)	15,789 人 (62,0%)
65 歳以上	5,565 人 (21,3%)	5,976 人 (23,5%)
世帯数	10,351 世帯	10,524 世帯
人口密度	43,5 人/km ²	42,3 人/km ²

表 1-1. から 4 年の間で人口が大きく減少していることが読み取れる。また、人口が減少しているにも関わらず、世帯数が増加していることから、核家族化の傾向を見ることができる。また、0 歳～14 歳までの人口も約 500 人近く減少しており、また、65 歳以上の高齢者人口も人口の 4 分の 1 に迫る勢いで、富良野市も他市町村でも問題視されている少子高齢化のまちであるということがいえる。

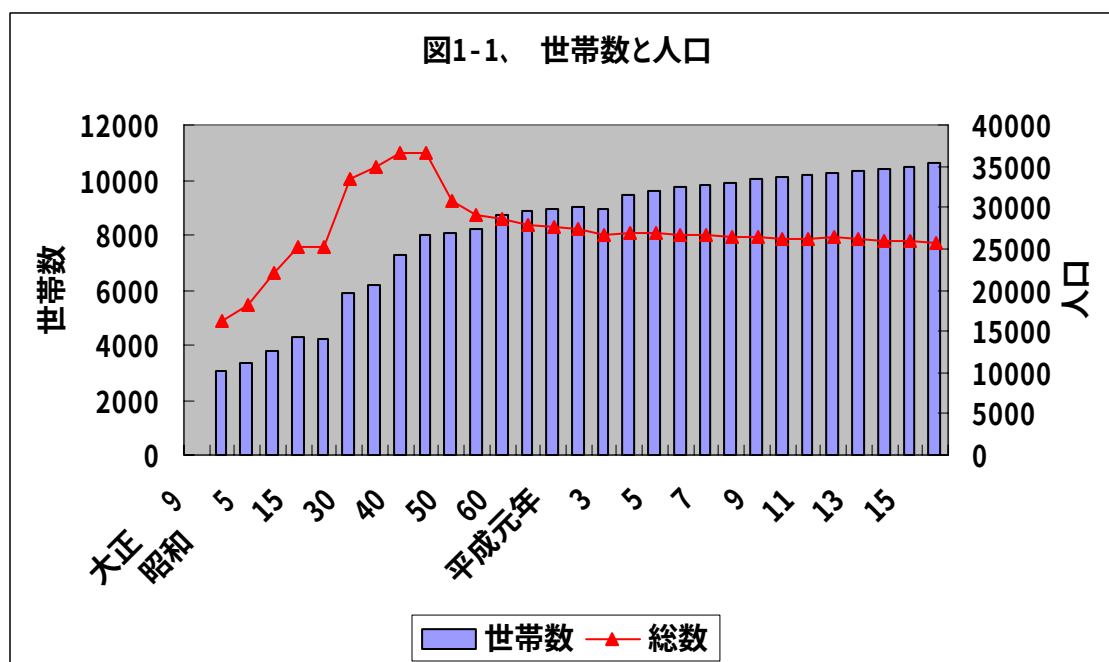


表 1－2. 富良野市の人口の推移

年別	世帯数	人口			備考
		総数	男	女	
大正 9	3075	16206	8474	7732	10 月 1 日 国勢調査
14	3328	18179	9447	8732	
昭和 5	3809	21993	11362	10631	
10	4307	25259	12901	12358	
15	4199	25265	12801	12464	
25	5855	33520	16734	16786	
30	6204	34833	17392	17441	
35	7305	36516	18140	18376	
40	8029	36627	18148	18479	
45	8058	30876	14764	16112	
50	8253	29155	13963	15192	
55	8742	28499	13780	14719	
60	8881	27876	13482	14394	
63	8913	27643	13583	14060	
平成元年	8994	27459	13543	13916	住民基本台 帳
2	8961	26665	12861	13804	
3	9484	27023	13080	13943	
4	9585	26831	12987	13844	
5	9720	26783	12945	13838	
6	9814	26683	12845	13838	
7	9911	26512	12733	13779	
8	10017	26514	12711	13803	
9	10073	26286	12571	13715	
10	10196	26293	12527	13766	
11	10262	26304	12537	13767	
12	10351	26252	12528	13724	
13	10409	26004	12409	13595	
14	10476	25850	12328	13522	
15	10595	25704	12250	13454	

図 1－1. 表 1－2. から昭和 45 年を境にまた人口が減少に転じており世帯数は一貫して増加している。このことから高齢者世帯、また、単身者世帯が増加していることを読みとることができる。

1-1-4. 土地利用（H15 年 10 月 1 日基本測量関係告示による）

表 1-3.

総面積	600,97 km ² (60,097ha)
田	39,44 km ² (6,6%)
畑	74,98 km ² (12,5%)
宅地	9,29 km ² (1,5%)
山林	427,47 km ² (71,2%)
原野	25,28 km ² (4,2%)
その他	24,27 km ² (4,0%)

表 1-3. から読み取れるように、富良野市の土地の多くは田、畑、山林である。山林については東大演習林、大雪山連峰なども含まれている。開拓された土地は約 70%が田、畑である。このことからわかるように富良野市は第 1 次産業に大きく支えられ、今もなお市の大切な産業の 1 つとなっている。

1-1-5. 生活・環境

富良野市はごみの減量化と資源リサイクルに大きく力を注いでいる。平成 13 年 10 月 1 日からは、「脱焼却、脱埋立」を合言葉に 14 種類の分別収集を行っている。平成 16 年 3 月には、ごみ資源率が 93.0%になり、日本でも有数の清掃事業を誇る。

1-1-6. 産業別人口

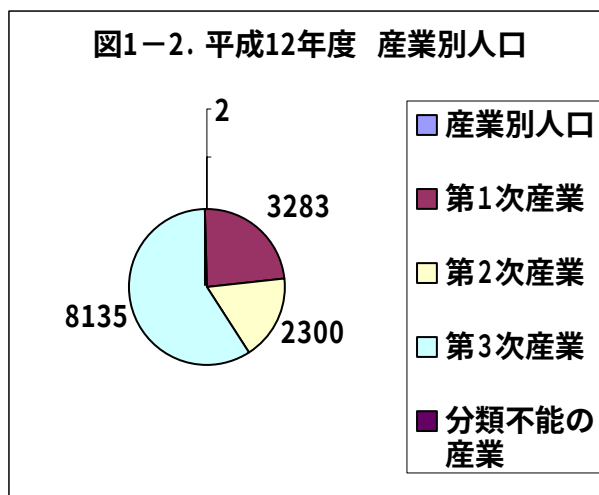


図 1-2. は富良野市の産業別人口を示したものである。第 1 次産業が大きな割合を占めており、富良野市の基幹産業は、今もなお農業ではあるのだが、観光業の成長などから第 3 次産業も大きな役割を示していることがわかる。

1-2. 歴史

表 1-5. 富良野市略年表

1897 年	富良野市の開拓がはじまる。
1899 年	東京大学演習林設置。
1900 年	旭川を起点とする鉄道が富良野まで延びる。
1913 年	滝川～富良野間の下富良野線が開通。
1916 年	老節布の入植がはじまる。
1944 年	平沢地区の入植がはじまる。
1947 年	北の峰で第 1 回全道滑降競技会開催。
1952 年	第 30 回全日本スキー選手権開催。
1966 年	富良野は山部町と合併し、市に昇格する。
1970 年	「第 1 回北海へそ祭り」開催。
1972 年	富良野市ぶどう果汁研究所設置。
1977 年	アルペンワールドカップ富良野大会開催。
1978 年	ふらのワイン（赤・白）新発売。
1981 年	ドラマ「北の国から」スタート。
1982 年	「第 20 回ワールドセレクションワイン部門」で、ふらのワイン赤・白とも金賞を受賞。
1984 年	私塾「富良野塾」設立。
1988 年	富良野市リサイクルセンター落成。
1995 年	観光入込客数が 200 万人を超える。
2000 年	「富良野演劇工場」建設。
2002 年	『2002 遺言』で「北の国から」終焉。
2006 年	スノーボード F I S ワールドカップ 2006 富良野大会開催。

富良野市の歴史は主に 3 期に分けられる。ここでは、明治時代、大正期から昭和中期、昭和後期から現在の 3 つに分類し、富良野市がどのように変わってきているのかについてみていく。

1-2-1. 明治期：入植と鉄道開通

入植

富良野市の開拓は、明治 29（1896）年に富良野原野殖民地区画の設定が行われ、翌明治 30（1897）年 5 月 7 日、中村千幹、妻コウの手によって開拓がはじまった。北海道の地理的中心、すなわち北海道の最深部に富良野は位置した。当時から富良野は北海道最後の開拓処女地として知られ、拓殖開始は北海道開拓に大望をいだく者にとっても、最後の機会であった。この新天地へ、一獲千金を求める野心家たちと並行して、北海道開拓に青雲の

志を抱く青年たちが次々と渡って行った。

富良野の開拓は困難を極めた。しかし、どんな厳しい条件の下におかれようとも、それに耐え、開拓を続けさせたものは‘希望’であった。家系によって自分の将来がほぼ決まってしまう本州の農村に居続けるよりも、たとえ数年は苦しくとも、努力次第で未来が開ける可能性が北海道にはあったのだ。

「私は昭和2年にここに移り、ここで一生を過ごす覚悟で独立した。入地した時は、未開地の中に畑がわずかに作られるといった有り様で、二キロから三キロの重い島田鍬や唐鍬を振るい、木の根、草の根を掘り起こし、十年あまりかかって切り開いた苦労は大変でした。倒した木の根は焼き払ったが、美しい田や畑を将来の夢と描きながら、一生懸命頑張ったものです」（小川与作、「学田郷土誌」から）。

「当時の富良野の市街としては二百戸余りであり、駅もあり一里で汽車に乗れるということは、未開の北海道とは申せ、鳥取に居住していた時代、駅まで十数里歩かねばならなかったのに比較して、むしろ便利に感じられ、一年、二年と経るにつれ住みよく帰郷する事を忘れて働いた」（山下清一、「扇山郷土誌」から）。

農民の大半は小作人だったといっても、働けば土地が自分のものになるという希望があった。

「当時の地主と小作は‘拓き分け’といって山林原野を拓き、検査があつて合格すると、その拓いた土地は、地主が半分、土地の所有権が出来たものだ。だからみんな一生懸命拓いた。木を切り山の様に積み上げ、惜しげもなく火をつけて焼いた。作物がよく育った」（八木橋萬太郎、「島の下郷土誌」から）。

努力は報われる。困難は克服できる。こう強く信じることでできた者だけが、開拓の苦勞を乗り越え、富良野の礎として、子孫を残すことができた。

鉄道開通

1900（明治33）年8月、旭川を起点とする鉄道が富良野まで延びた。鉄道は富良野盆地にできたいくつかの集落の一つにしか過ぎなかった下富良野を、富良野盆地の中核都市へと成長させた。木材、そして農産物、富良野盆地の富良野が下富良野に集められ、ここから鉄道に載せられ消費地へと届けられた。

1913（大正2）年には滝川～富良野間の下富良野線（現：根室本線）が開通し、下富良野の交通の要衝としての地位はますます確かなものとなった。「富良野繁栄誌」は、当時の状況を次のように記している。

「この地の有望なる事績を来町者の見聞によって社会に宣伝せらるるに至りたればその結果は、移民の激増を来し、当地の戸数漸く九百六十戸に過ぎ去りしに、人口は七千六百五十六名の多数を算したるに徴して市況の如何に隆賑を極めたるか想像するに難しからざるべし」。

そして、「富良野繁栄誌」は繁栄の起因を木材に求めている。

「当地の主要産物たる木材は漸く鉄路の便を用い輸出せらるる事となりたければ、木材業者の入山すること付随して多数の杣夫搬出人往来したれば四方の山林倒木の音絶え間なく、市街は為に終夜弦声の響き艶めかしく非常に隆盛を極めたる」。

現在も富良野の三分の一の面積を占めている東京大学演習林は、1899（明治 32）年に設置されている。今でこそ林業研究の実験場となっているが、設置当時は、木材を切り出しその収益を大学の運営費に充てることが目的とされた。演習林内の平地を農地として小作に貸し与え、安価な小作料で営農させる代わりに、農閑期に演習林の山仕事を行なわせるという「林内植民」の制度もここではじめて設けられた。有史以来、人の手が入ったことのない原生林が延々と続く富良野の山林は北海道最後の木材資源の宝庫だった。

鉄道の開通は、自給自足の農村経済を市場経済に直結させた。これにより作物を売って収入を得ることが容易になり、開拓農民の暮らしを大きく向上させた。一方、それは世界的な景気変動と開拓農民の暮らしを結びつけることでもあった。高騰と暴落、そして冷害によって農民の生活は大きく変貌せざるをえなかった。大正末から昭和にかけて、乱高下する相場に翻弄され農業をやめる者が富良野盆地でも続出した。生き残った農民は、一獲千金の夢を捨て、相場に左右されない堅実な営農を目指していく。そのためにも富良野盆地での米作りが望まれた。

1-2-2：大正期から昭和中期：新たな土地の開拓

戦争に伴い富良野でも、新たな開拓をはじめることとなる。それは、大きく分けて2つの地域から始まることとなる。老節布、平沢がそれである。ここからはその2つの地域の開拓について述べる。

《老節布》

《入植当時の状況》

人跡未踏の自然の大地、豊富な森林資源を守っていくため、演習林は、林内植民制度を設け、ある時は山火防止、ある時は労働力の供給源としての役目をになって登場し、それに伴って老節布も脚光を浴びるようになった。

農地として決まった老節布は道幅 1.3 メートル（4 尺）の林道がつき、1 画 4 ヘクタールの測量が完了していた。さらに、当時、江別にあった製紙工場へ、パルプ原料として売却すべき針葉樹林は、山口造林部の手によって伐採されていたが、タモ、ナラ、セン、カツラ、シナの木等の濶葉林は天高くそびえ、その下には、親指程の熊笹が青畳を敷きつめたように地面を埋め、その中に、エゾ松、トド松の伐根が、ぶかっこうな姿を見せていた。夜は暗やみで、風は無情にも梢を鳴らし吹き去る音は、一層、寂しさを増し、昼は、キツキの音がこだまし、小鳥の転々と飛びかう様は、開墾する者のせめてもの慰めでもあり励ましでもあった。大声で「熊が出ているぞ」と叫ぶ声は聞こえても、人影が見えない状態の中で、まず始めなければならない仕事は住みつく小屋の建設だった。

《開拓当時の農業》

入植後、ただちにはじめなければならない仕事に、木の伐採と笹刈りがあった。

伐採した丸太を、数か所に集め、演習林の火番が回ってこない夜に焼く。パチパチとなる音、パンパンとはねる音、火と煙が天を突いて上る有様は、壮観なものであったという。朝になると、残り火に水をかけて消しておく、こうして、倒しては焼き、笹を集めては焼き次第に切り株だけを残した黒い土がわずかずつつ出てくる。そこを島田鍬、鎌、熊手ぐらゐの農具で、自家食料の確保に重点をおき、麦、ソバ、イナビキ等を栽培した。

しかし、第1次世界大戦の影響により、豆景気は良く、テボ、青エンドウは最高24円もしていたが、1918（大正7）年には大暴落し、たったの4円になった。好景気のまっただ中に入植したとはいえ、老節布地区の先駆者には、恵まれなかったのである。

生活は、益々苦しくなり、冬山に稼ぎに行っても、借金の利息しか働けず、この老節布の地から去って行った人も多かった。

《平沢》

《入植当時の状況》

入植地として決まった平沢は、大木が立ち並ぶ、昼尚暗い森林であった。道路と云えば、演習林が管理道としていた1.5mに阻まれ、裏木の上や枝の下を潜って歩いていった。林道のなかった所では造林道を利用した。立木、熊笹が生繁っているため声は聞こえても、隣の小屋が見えなかった。夜になれば、時々鳴くフクロウの声が猶一層淋しさを増した。昼になると打って変り、小鳥が囀りキツツキの音が餌し、木鼠が木の枝を飛び移る様を見て心ななしい思いをした。雪解けも終りになった頃より、住みつく小屋の建設にかかった。

《開拓当時の農業》

開墾は木の伐採よりはじまり、良材を数ヶ所に集積し、その後、笹を刈り、一定面積の外周に火防線を切り、火をつけて山焼きするのである。山焼きには、演習林から、火入許可を取り、火防係員の見守る中、部落総出で、火入れを行なって来た。火をつけると、火注と煙が天に舞い、その有様はまことに壮観であった。この山焼きの残り火の為、演習林内を焼く山火事に発展した事も数件あり、跡始末には三人位で噴霧機を背負い夜中まで見廻りをしたのである。その後、黒コゲの残木を集積し、空地を縫うように島田鍬で土を筋に切り、麦類、豆類を蒔いた、二年目からは、一鍬一鍬根気よく耕したが、困難な仕事であっても、島田鍬、鎌、熊手位の農具で、自家食糧の確保に重点をおき、頑張ったのである。農耕馬が入ったのは1949（昭和24）年からだが、馬耕作業が出来るまでは数年かかった。馬耕で一日50aぐらいであったのだが、現在はトラクターで2haから5haも耕すようになっている。

《入植と開墾》

入植当時、土地の配分は入植希望者を役場会議室に集め、抽選により土地の割当をしたが、適地、不適地の差が甚だしいため、この割当がそのまま経営に大きく影響を及ぼす結果となった。入植当時の開墾は現在の様な機械もなく、まったくの人力で、自力による遅々

とした開墾であり、切り倒した木を薪にし、開墾した面積によって当る開墾補助金だけが収入源であった。1948（昭和 23）年より火薬抜根事業がはじまり、資格を得た中島良一開拓主事、林政雄氏、相馬五郎氏、半田健一氏の四名が火薬取扱者となり、中島主事は熊之沢西達布地区、林政雄、相馬五郎の両氏は平沢地区の抜根事業に従事、早期開墾に大きく貢献した。

地区内では、旧東光、稔地区が立木の密生が多く、開墾に非常に邪魔になったが、又、換金になる宝でもあり、或る人は炭を焼き、又薪にして、生活の糧にして来た。

今まで何回となく土地改良、土壤改良等を施し、根株もきれいに抜根され、永い間の農耕馬作業もなくなり、現在では、トラクターを始め、各種の機械が、畑の中、又、道路を走る。

1-2-3. 昭和後期から現在

富良野市は古くから農業で栄えてきたが、その他の産業も盛んになる。昭和後期になると「FIS ワールドカップスキー大会」を誘致したこともあり、「スキーのまち」として有名となり、1981（昭和 56）年には、倉本聰氏が富良野を舞台として描いた「北の国から」が放送され、全国から多くの観光客を呼び、北海道を代表とする観光地となっている。

その背景には、多くの住民の努力があった。富良野スキー場の近代的なスキー場への発展の背景に、「北の峯観光開発株式会社」があったように、ドラマ「北の国から」の成功の背景には「富良野 J C」（富良野青年会議所）のメンバー達の活躍がある。富良野を人に知られるまちにしたい。ただその気持ちを原動力として、21 年間、富良野を舞台としたドラマ「北の国から」を陰から支え続けたのである。

その中心になった一人である中世古義雄氏は、協力者として八面六臂の大活躍をする。

富良野市麓郷の中世古氏の事務所の玄関には、ドラマの中で俳優の地井武雄氏が経営しているとされた「中畑木材工業株式会社」の看板がそのまま掛かっている。実際は中畑木材ではなく中世古氏が経営する「麓郷木材工業」である。また、ロケにあたっては事務所をまるごと貸し出すだけでなく、現地の窓口として大奔走する。現在でも「北の国から資料館」の運営に携わり、放映された 21 年間、そして、現在に至ってもドラマ「北の国から」を支え続けている。

2005（平成 17）年には倉本聰氏が脚本を描いた TV ドラマ「優しい時間」も始まり、

舞台となったニンゲルテラスには多くの観光客が足を運んでいる。

2. 産業

2-1. 農業

表 2-1-1. 農業戸数・農業人口と耕地面積の推移

区分 年	農業戸数(戸)				農家人口		耕地面積	
		専業	1 種兼業	2 種兼業	(人)	就業者数	(h a)	農家一戸当
S 60	1543	942	474	127	7099	4629	10018	6,49
H2	1377	655	595	127	6351	2779	10117	7,35
H7	1218	485	573	160	5504	2471	9956	8,17
H11	1067	463	479	125	4653	2213	9612	9,01

(資料：農業基本調査、農林業センサス)

表 2-1-2. 農業粗生産額

(単位：百万)

年度 区分		S 60	H2	H7	H8	H9	H10
穀 種	米	2482	2149	1915	1729	1545	1423
	麦類	1142	911	464	511	531	901
	雑穀豆類	448	292	315	297	275	265
	いも類	712	745	681	742	545	486
	野菜	7145	13071	12927	13700	11691	14201
	果実	62	92	101	89	106	68
	工芸	777	785	750	662	586	747
	その他	104	116	180	146	147	146
	計	12874	18161	17333	17876	15426	18237
畜 産	肉用牛	257	159	223	202	208	179
	乳用牛	943	1156	1453	1739	1859	1886
		生乳	784	980	1319	1585	1738
	豚	557	344	170	194	121	161
	その他	63	29	47	30	19	22
計		1820	1688	1893	2165	2207	2248
粗生産額計		14694	19849	19226	20041	17633	20485

(資料：農政課)

表 2-2-1. からは、農業戸数が十数年の間に約 500 世帯近く減少していることが読み取ることができる。表 2-1-2. から国の減反政策により稲作が低迷し、野菜類が大きく伸びている事がわかる。また、麦類やその他の穀類も減少が見られる。この背景には、国際化の進展や生産物価格の低迷など農業を取り巻く環境が厳しくなっていることが挙げら

れる。しかし、食料に対する消費者ニーズの多様化が進む中、地球環境問題や安全な食料に対する関心が高まりをみせている。その状況において、日本の農業はもちろん、富良野の農業は多角的な機能を発揮することが求められている。

表 2-1-3. 主な農作物（作付面積は平成 15 年度）

農作物	作付面積	
たまねぎ	1,237ha	全国 2 位
にんじん	621ha	全国 2 位
かぼちゃ	311ha	全国 3 位
スイカ	135ha	
メロン	170ha	全道 3 位
スイートコーン	349ha	全国 4 位

表 2-1-3. から富良野市は全国でも有数の農業のまちということがわかる。しかし、近年では、外国からの輸入も盛んに進められていることから、離農を余儀なくされる農家も少なくない。

2-2. 工業、商業

2-2-1. 工業

表 2-2-1-1.

工業製品出荷額等の推移				製造品等出荷額		
年度	事業所数	従業者数	1 事業所当	(百万円)	1 事業所当	1 従業者当
S60	40	589	14, 7	8624	215, 6	14, 6
H 6	45	752	16, 7	13105	291, 2	17, 4
H 7	45	708	15, 7	13074	290, 5	18, 5
H 8	42	726	17, 3	12884	306, 8	17, 7
H 9	40	687	17, 2	11944	298, 6	17, 4
H 1 0	39	622	15, 9	11400	292, 3	18, 3

(工業統計調査)

(*) 従業員 4 人以上

表 2-2-1-1 から、製造品等出荷額が昭和 60 年から平成 10 年の間の十数年の間に 1 事業所当で約 80 万以上になったことがわかる。

工業の内訳としては、平成 13 年 10 月 1 日の事業所・企業統計調査からみると、鉱業事業所数 7、建設業事業所数 108、製造業事業所数 62 である。

2-2-2. 商業

表 2-2-2-1.

年度	商店数			従業者数			販売額（円）		
	総数	卸売業	小売業	総数	卸売業	小売業	総額	卸売業	小売業
S60	439	59	380	2244	546	1698	54802	18373	36429
S63	436	63	373	2229	450	1779	51222	18644	32578
H3	419	72	347	2711	909	1862	66845	25988	40857
H6	392	70	322	2232	492	1740	63367	21340	42027
H9	392	63	329	2282	447	1835	68444	21922	46522

（商業統計調査）

表 2-2-2-1. より、商店数が昭和 60 年から約 50 店舗以上の小売業商店が閉店している事がわかる。販売額の増加と合わせて考えると、コンビニエンスストアの参戦、スーパーマーケットなどの大型店舗の登場により、個人経営や家族経営の小売業商店が経営を続ける事ができなくなったことが要因として考えられる。また、販売が 1988 年（平成 3 年）から急激に伸びたことにはドラマ「北の国から」により、観光客が増加した事が考えられる。

2-3. 観光業

富良野市の観光入り込みは、昭和 54 年度、初めて 100 万人を突破、平成 7 年度から 9 年連続して 200 万人を突破している。

表 2-3-1. 平成 15、16 年度 富良野市の観光入込概要

	平成 16 年	平成 15 年	前年度比
観光入込総数	2,031,158 人	2,455,188 人	－17,2%
宿泊客数	426,172 人	494,727 人	－13,9%
訪日外国人宿泊数	7,643 人	5,306 人	＋44%

表 2-3-1. から、訪日外国人宿泊者数が増加していることがわかる。要因としては、SARS 終焉、アジア経済の好調を背景に富良野・美瑛広域観光推進協議会による外国人招聘事業や国土交通省による「ビジットジャパンキャンペーン」による効果により、アジアからの訪日が激増したことが挙げられる。

図 2-3-1. 富良野市観光客入込み数の推移

年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
S 4 0	840	18374	6700	9000	5360	3600	5000	1205	12425	54505	42138	21628	180775
S 4 5	5480	44488	11941	16878	18259	13460	12165	2540	32069	101117	78501	54492	391390
S 5 0	20300	62653	33425	36020	45635	28405	23636	4745	42380	141140	151300	101835	691474
S 5 1	32100	77218	31970	43390	49950	29930	19641	10440	68494	205244	177528	149383	895288
S 5 2	46597	49336	46824	54213	61305	35407	24950	10300	48099	225747	195363	164182	962323
S 5 3	57278	38801	35654	48720	53697	33913	30783	19784	73561	288234	102127	183427	965979
S 5 4	56362	41682	35681	49927	58445	34964	27554	14651	21369	252309	237342	229079	1059365
S 5 5	66297	55435	35915	53025	47681	38365	22897	12378	57531	274141	265057	247639	1176361
S 5 6	65780	23626	36056	39370	32134	30180	22969	24825	51570	287508	280272	279293	1173583
S 5 7	28167	30874	29665	67176	76069	46149	14532	5524	83453	316983	300453	299103	1298148
S 5 8	18056	32794	29872	69937	84268	39462	19482	5160	122846	331252	325786	321671	1400586
S 5 9	50591	49304	42972	73525	70127	42618	31889	7118	87953	278348	214517	212450	1161412
S 6 0	46803	49304	52230	100347	104117	50184	44194	16421	107005	280697	231903	253733	1336938
S 6 1	78529	53846	58771	108771	127789	67391	37693	16978	122950	341993	288163	255675	1558549
S 6 2	38728	58839	58705	124391	132603	70552	48681	17058	135430	362718	324487	314320	1686512
S 6 3	43943	65668	67029	152688	133603	79694	52356	12971	108118	397629	365957	373778	1853434
H 1	33884	72852	64004	185274	149494	77301	56209	13534	139090	424653	377781	382033	1976109
H 2	31399	75927	65314	211891	151550	79206	58117	14214	87934	393484	321252	388298	1878586
H 3	31228	83736	68270	244396	166927	92306	58814	12558	154500	414054	371203	354576	2052568
H 4	20897	84170	76774	263945	173650	95440	60576	15826	134969	392557	352659	343224	2014687
H 5	27260	75708	71690	263595	174255	94384	54833	12225	146204	340537	295362	309062	1865115
H 6	22975	64335	74067	278738	207972	104926	73219	13126	123915	323360	272780	276454	1835867
H 7	31445	80133	68823	350894	284089	126696	79094	12241	123278	291920	289081	294763	2032457
H 8	47438	82505	88378	343346	287604	129648	79310	22306	151671	313519	297312	306111	2149148
H 9	57577	77208	94785	352631	279305	120718	86654	17393	147294	264994	280062	304103	2082724
H 1 0	56212	81009	119650	450313	342179	186387	99528	32876	169882	293013	265212	280725	2376986
H 1 1	57696	91226	162559	459552	340595	164096	89669	17802	149397	261431	245557	254549	2294129
H 1 2	43627	87467	160948	412192	319211	156260	95354	26737	156351	231724	213243	240021	2143135
H 1 3	48875	80978	154253	425438	299581	156276	100278	25441	172798	234645	202129	221819	2122511
H 1 4	46753	98108	173881	428257	331563	332854	202389	44511	190249	235491	190858	215270	2490184
H 1 5	65384	161408	225560	523620	426439	217503	112609	39369	151428	206240	159209	166349	2455118
H 1 6	52428	129462	164125	400096	320537	173314	104045	33907	127731	199616	155742	170610	2031613
H 1 7	65143	146376	167178	396009	303987	192402							1271095

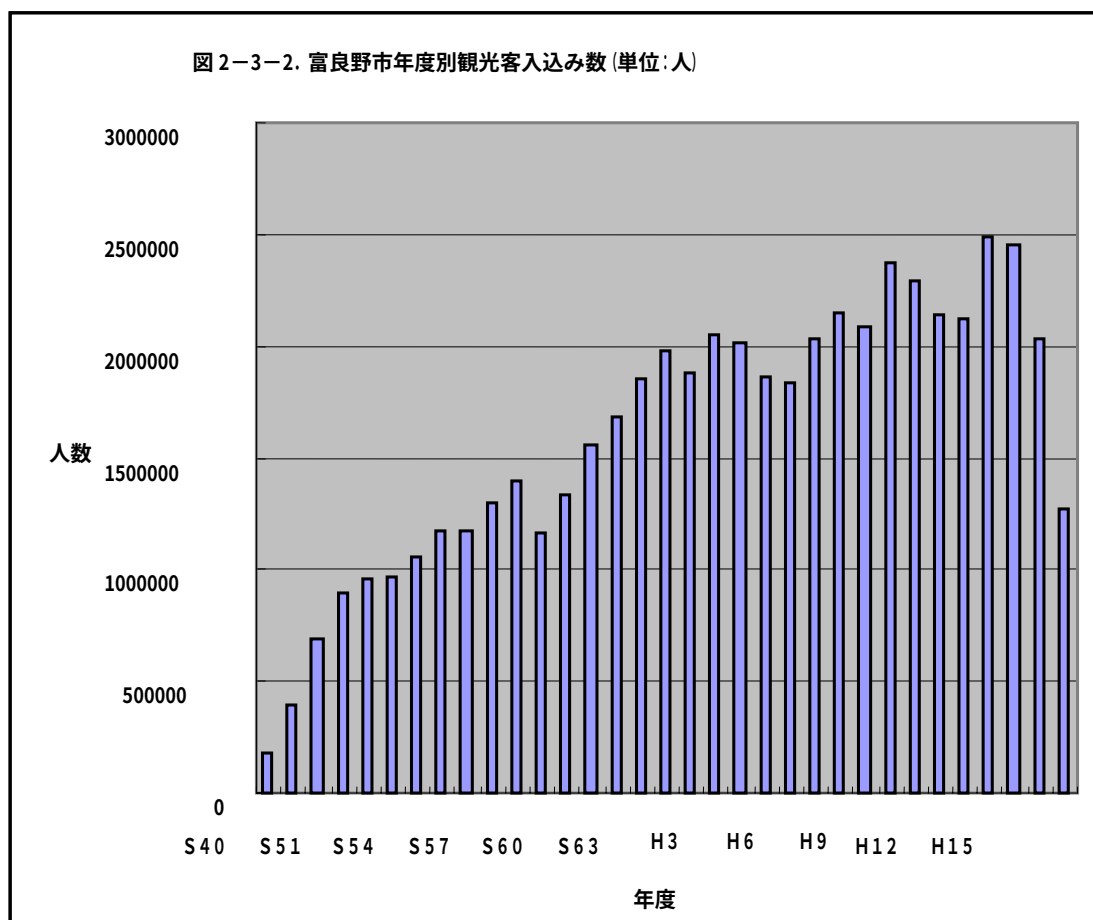


図 2-3-1. 図 2-3-2. から冬季では第 30 回冬季国体を誘致した 1975 (昭和 50) 年以降、夏場では、ドラマ「北の国から」の放映がはじまった 1981 (昭和 56) 年以降、観光客が増加していることがわかる。1991 (平成 3) 年には、観光客数がはじめて 200 万人を超え、1995 (平成 7) 年以降は安定して 200 万人の観光客を誇っている。また月別で見ると、7 月の入込み客数が多く、やはりドラマ「北の国から」の影響は、多角的に考えても富良野市にとって非常に大きなものとなっているということがいえる。

3. 主要観光地の実態

表 3-1. 平成 15・16 年度主要な観光地・イベントの観光入込み客数 (単位:千人、%)

観光地点名	上期 (4～9 月)	下期 (10～3 月)	年間	前年度比
麓郷の森エリア	537,2	88,7	625,9	67,8%
ぶどうヶ丘公園	159,6	15	174,6	73,2%
プリンスリゾートエリア	111,5	599,7	711,2	89,6%

イベント名	開催時期	参加者数	観光入込み客
北海へそ祭り	7 月 27～29 日	4,4	25

3-1. ふらのスキー場

富良野スキー場は、良質な雪質ということ、また、国際的なスキー場ということもあり、冬季、観光客を富良野市に呼び込むための大きな原動力となっている。冬季には、道外から修学旅行生の団体や海外からもスキーを楽しむために多くの観光客で賑わっている。しかし、地元市民の利用度がそれほど高くないという現状も見られる。要因としては、リフトの価格が高く、また、スキー場へのアクセスが不便という理由があげられる。冬季の観光客数も年々、微減であり、新たな可能性を見出す必要が求められている。

富良野スキー場の歴史

富良野スキー場は、前身の北の峰スキー場の時代から競技スキーの大会によって発展してきたゲレンデである。

1947 (昭和 22) 年、北の峰で第 1 回全道滑降競技会が開催された。もともと札幌で開催されるはずだったものが実施不能となり、代替地を求めて富良野町で開催されることになったのだが、大会に参加した関係者の評価は高く、1951 (昭和 26) 年ごろまで連続して大会が開催されることとなった。この大会が基礎となって第 30 回全日本スキー選手権が 1952 (昭和 27) 年に開催される。

全国大会が開催されるスキー場といっても、この時代、リフト 1 本なく、数時間かけて山に登り、立ち木の中を滑り降りるという山スキーのゲレンデにしかすぎなかった。この北の峰が現在の形に発展していった過程に、竹内武夫、鴨田茂の貢献があった。

竹内武夫は、1896 (明治 29) 年に室蘭生まれ、北海タイムス旭川支社長、北海道議会議員を経て、1937 (昭和 12) 年、富良野に移転。富良野に移ってからは観光開発に取り組み、1950 (昭和 25) 年「富良野芦別平原」を毎日新聞社が主催する日本観光地百選の平原 10 景第 4 位に押し込んだ。北海道中央経緯度観測標の存在を北海道の中心として売り込んだのも竹内が最初である。

こうした竹内だけに早くから北の峰の価値に着目し、宣伝に努めていた。1956 (昭和 31) 年、竹内は北の峰の一層の発展を期して、スキー愛好者として知られた高松宮様を北の峰に招待した。この時宮様は、ゲレンデの魅力を高く評価しつつも、リフトのないとこ

ろはスキー場とは呼べないと断じた。

リフトの設置は宮様から課せられた宿題となった。しかし、リフトの設置には莫大な資金がいる。ここで地元経済界を取りまとめ、スキー場開発に献身的な努力をしたが、当時商工会議所会頭であった鴨田茂である。鴨田は株式を発行し、市民から資金を募って「北の峯観光開発株式会社」を設立、ロッジとリフトを整備した。これには道議会議員の奥野善造、そして市長の高松竹次が強力な支援を行なっている。

こうして近代的なスキー場としての陣容が整うと、富良野は冬季国体の誘致に走り出した。1975（昭和 50）年、この年、富良野は第 30 回冬季国体と全日本スキー選手権という大きな大会を立て続けに開催した。この成功が 1977（昭和 52）年のアルペンワールドカップ富良野大会につながっていくのである。

大会の成功のたびに知名度を高めていった北の峰であったが、それに伴い宿泊施設やリフトなどの拡充に一層の投資が望まれた。しかし、地元資本である北の峯観光開発にはこれ以上の投資を続ける体力がなく、高松市長の仲介で、かねてから富良野進出を計画していた国土計画が、1972（昭和 47）年、事業を引き継いだ。そして、ワールドカップ開催にあたって、富良野の都市名を世界にアピールするために、スキー場名が現在の富良野スキー場に変更されたのだ。

今、世界のスキー関係者で「ふらの」の名を知らない者はいない。

2006（平成 18）年には、「全国高等学校選抜スキー」、「スノーボード F I S ワールドカップ 2006 富良野大会」が開催される予定である。

平成 16 年度の観光入り込み客数は、年間で 71 万 1200 人となっており、前年と比較すると、10.4%の減少となった。修学旅行客の利用やドラマ「優しい時間」のロケ地であるということからも大きな減少は見られなかったのだが、スキー場のこれからを考えると、大きな問題点が挙げられる。それは、市民の利用があまり見られないという点である。これから、富良野スキー場がより発展していくためには、地元住民の力が必要である。地元住民に対してより手厚いサービスをすべきではないのだろうか。交通面でもスキー場に行く手段は限られており、自家用車を持たない家族にとってスキー場に行く事は、非常に不便である。例えば、市民を地元のタクシー会社と提携し、低価格でスキー場へ送ることのできるシステムを確立させるなどという改革が必要であるといえる。

3-2、ふらのワイン工場（富良野市ぶどう果樹研究所）

国の減反政策が始まって間もなくの頃、地元農協による園芸推進の一方、富良野市として傾斜農地や石れき地等不良農地の有効利用のために、農産加工事業の取り組みが検討された。農産加工事業の採択にあたっては、品目の選定要件として、原料の生産性、製品の消費動向、事業成果と産業振興、などの諸条件について検討が加えられ、その結果、加工品目として、富良野市の気象条件が適していること、消費動向および将来性から、ヨーロッパ系専用品種ぶどうおよび富良野周辺に自生している山ぶどうによるワイン事業を富良

野市直営として採択することが決定される。

ふらのワイン工場は「豊かな農村・観光都市建設をめざして」という目的のもと、1972（昭和 47）年 4 月富良野市ぶどう果樹研究所を設置しスタートする。1978（昭和 53）年 1 月には、ふらのワイン（赤、白）が発売、1982（昭和 57）年 8 月には、モンドセレクション主催による「第 20 回ワールドセレクションワイン部門」でふらのワイン赤・白とも金賞を受賞、事業スタートか 10 年目にして、ふらのワインは名実共に富良野を代表する産業の 1 つとなったのである。また、1988（昭和 63）年 4 月には、ワイン関連事業として、ぶどう果汁原料用品種試験栽培を実施、現在では、ふらのぶどう果汁も土産品として親しまれており、また、価格も手ごろなことから市民からも多大な人気を誇っている。

ふらのぶどう果汁は、ワイン愛飲者の輪が広がる一方、家庭やレストランでの団欒にワインを飲めない方や子供にも十分楽しめるように、また、ワイン醸造技術を生かせるように、1986（昭和 61）年から検討が開始され、「アルコールのないワイン」をキャッチフレーズにワイン関連事業の地域特産品として取り組むことになる。ふらのぶどう果汁工場は、平成元年第一回定例市議会で議決を得、総事業費 2 億 2000 万円、その内 8000 万円を「ふるさと創生事業資金」を充当して建設された。

注目しておきたい点としては、ふらのワイン、ふらのぶどう果汁を製造している富良野市ぶどう果樹研究所は企業管理者として市長が就任していることである。富良野を代表する観光業の中でも、この事は非常に貴重なことである。まさに、自治体発、富良野市が積極的に事業に携わり、運営している観光産業の姿というものは富良野市の主要産業の中では珍しいものとなっている。また、ワイン事業に取り組んでいる市町村の中でも富良野市のように原料から加工まで全ての工程を地元で行なっているという自治体はない。ワインで有名な池田町でも原料を提供する農家数が 14 戸と 100%というところまではっていないのに対して、ふらのワインは 40 戸以上と 100%地元のものを使用している。このことは高く評価されるべきことではないだろうか。

平成 16 年度のぶどうヶ丘公園における観光入り込み客数は、17 万 4600 人となり、前年度に比べて 26,8%の減少となった。この要因としては、夏場は猛暑で、かつ平年の 3 倍となる 9 個の台風が日本列島を直撃したことが旅行者数減少の大きな要因の一つとして挙げられる。

3-3. ドラマ「北の国から」による観光実態

表 3-3. ドラマ「北の国から」の放送状況と視聴率

年代	タイトル	視聴率
1981 年	連続ドラマ	約 15%
1983 年	「北の国から '83 冬」	約 26%
1984 年	「北の国から '84 夏」	約 24%
1987 年	「北の国から '87 初恋」	約 20%
1989 年	「北の国から '89 帰郷」	約 33%
1992 年	「北の国から '92 巣立ち」	約 32%
1995 年	「北の国から '95 秘密」	約 31%
1998 年	「北の国から '98 時代」	約 25%
2002 年	「北の国から '02 遺言」	約 35%

連続ドラマの放送が開始されたのは 1981（昭和 56）年のこと、2003（平成 15）年、戸長役場の設置から数えて 100 年という節目を迎える富良野市は、その 5 分の 1 の年月を、『北の国から』とともに歩んできたことになる。

今や北海道でも有数の観光都市に成長した富良野。『遺言』の放送された 2002（昭和 14）年には、富良野市の観光客入り込み数は過去最高の 249 万人を記録している。ドラマ「北の国から」の船出は簡単なものではなかった。ド田舎色の強い演出にスタート当初は、富良野市民の中にでさえもかなりの批判があった。「富良野は、そんなイナカじゃないよ」という声や「ただでさえ、嫁の来手のないところなのに…」などと。

そのような非難の中でも「北の国から」は『2002 遺言』で幕を下ろすまで、21 年間しっかりと成長を遂げ、私たち市民に誇りと勇気を与え続けた。その成果は、放映からの観光客数の増加に顕著に見られるのだが、「北の国から」がもたらしたものは観光客だけではない。それにまつわる面白いエピソードがあるので、ここで紹介する。

2003 年 3 月ー。

『屋根』という芝居の全国公演を終え、富良野の地に戻ってきた倉本聰と富良野塾の面々を、多くの市民たちが出迎えた。その席上で、あいさつに立った高田忠尚富良野市長は、こんな印象的なことを語った。

「この二十年間の、富良野の変化を象徴する、大きな出来事があります。

それは、今、全国で“過疎のまち”に転落する市町村が多い中、富良野は、平成十二年の国勢調査で『過疎からの脱却』という農村都市ではきわめて珍しい現象が起こったことです。このことは、何にもまして倉本先生がなされてきた文化発信、そして富良野塾を通しての人づくりが、このまちに大きな活力を与えてくれた、その証拠であろうと、大変感謝申し上げたい次第でございます」

（「おかえりなさい『屋根の夕べ』にて」）

妻に逃げられ、東京から二人の子どもを連れて、故郷の過疎地に舞い戻った黒板五郎は、その「過疎」という字を書けないダメ男として、私たちの前に登場する。以来、21年間一。五郎一家の物語は、多くの視聴者を釘づけにした。

ドラマがあゆんだ21年とは、2003年に開庁100年を迎える富良野市のあゆみの、じつに5分の1に相当する。その間、過疎のまちを舞台としたこのドラマによって、過疎だった富良野のまちは大きな変貌を遂げることになったのである。。

「僕の中では黒板五郎が消滅したわけじゃないし、麓郷に行けば黒板五郎がずっと住んでいるという感覚がしっかり残っています。たまたま放送という形態の中では、世間の人には見えなくなるということに過ぎないのです。」

(広報ふらの・「北の国から特集号」)

富良野を訪れば、その後の五郎一家の消息がわかるという“仕掛け”をつくってゆくことが、観光客への大きなアピールにもつながるとさまざまなメディアを通して発信する。2003(平成15)年6月からは富良野駅前にあるレンガ倉庫を再利用した「北の国から資料館」の通年営業に乗り出している。展示や内装は、倉本がプロデュースし、ここを起点に、「続・北の国から」を全国に向けて発信してゆくかまえである。観光協会も、この試みをバックアップし、現在の「拾って来た家」の入場料を積み立て、除々に「～やがて町」の建設を行なってゆくという。

3-4. 北海へそ祭りについて

ドラマ「北の国から」の中でもたびたび「北海へそ祭り」のシーンが登場する。北海道内の伝統芸能と称するものが出身県の芸能をそのまま持ってきただけのものが多い中であって、お腹に人面を描いて踊る北海へそ踊りは、まったく富良野の独創である。

1966(昭和41)年、富良野は山部町と合併し、市に昇格した。これに合わせて市民憲章を策定しようとした時、原案作りを任された者たちは大きな難問に直面する。富良野のシンボルは何か。富良野市民統合の象徴は何か。今流に言えばアイデンティティの問題に直面したのである。開拓からおよそ八十年。生きること、作ること、育てること、ただこれだけを富良野の人々は考えてきた。思春期という大人の入り口に立った少年が自問自答しはじめるように、この時、富良野人たちは自問自答した。

そしてたどり着いた答えが「北海道の中心」という自負であった。さらにこれを市民啓発普及しようと考案されたのが「北海へそ踊り」だったのである。

市民憲章の文案を作り、北海へそ踊り考案に中心的な役割を果たしたのは横尾栄治郎、森田藤八、そして操上秀峰の三人。この中の操上秀峰は、富良野で最初に稲作を試み、周囲の反対に挫けず家族だけで造田事業に取り組んだ操上貞次の血をひく。

開拓の時代とは、成功も、失敗も、すべて自分から始まり、自分で終わった時代である。自分の主人は自分である、と思えた者だけに明日を生きる権利が与えられた。自分たちこそは北海道の中心と考える思想。これこそ開拓者の思想そのものなのではないか。

ハァー まんなか まんなかの どまんなかヨ
西に徳平 東に千幹 ヘソで拓いたおらがまち
(北海へそ音頭五番・操上秀峰作詞)

1970（昭和 45）年に第 1 回北海へそ祭りが開催され、第 5 回（1973 年）からは踊り手は 1000 人を超えている。また、第 30 回（1998 年）では 2 日間で 140,000 人と過去最高の観光客数を記録している。近年では、2004 年度の北海へそ祭りは 7 月 27 日～29 日に開催され、2 万 5000 人もの観光入込み客数を記録している。また、参加者数も 4400 人となっている。

4. これからの展望

これまで述べてきたように富良野市には、多くの恵まれた産業があり発展してきた。農業を主幹産業として、富良野スキー場の建設、また、ドラマ「北の国から」の放映などから「観光のまち」としても全国に名を轟かせるほどになっている。しかし、スキー客の減少やドラマ「北の国から」の終焉などから今後多くの不安材料が残る。富良野市には、新たな「産業」の創出が必要とされていると思われる。ここでは、道外からの定住者の呼び込み事業とスポーツを可能性として考察する。

4-1. 定住者の呼び込み事業の今後の可能性

富良野市では、現在、近隣の美瑛町と協力し、観光の新たな可能性として「ふらの・びえい人になるキャンペーン」を実施している。今年度も2月1日から2月28日まで行なわれる予定である。このキャンペーンの「ふらの・びえい人」とは「この地域の暮らしに飛び込み、遊び、楽しみ、感動する人々」という認識のもと進められているのだが、冬季のイベントやサービスを、観光客の方はもちろん、市民や町民の方々にも体験してもらうというコンセプトに進められている。このキャンペーン中には、パスポートが発行され、期間中「ふらの・びえい人」は無料シャトルバスに乗る事ができるなど今までの利益追求型の観光のスタイルとは大きな違いが見られる。このキャンペーンの先には、富良野や美瑛の魅力を観光客の方に知ってもらい、やがて、定住してもらいたいというねらいが見受けられる。富良野市はもちろんであるが、美瑛町や上富良野町、中富良野町、占冠村でも若年層の都市部流失が顕著に見られる。要因としては、これらの市町村には雇用の場が少ないこと、また、大学や専門学校がほとんどないことがあげられる。そのような時代の中で、若年層の人口の定住を目的として進められているのである。

このキャンペーンは昨年度も行なわれたのだが、このキャンペーンに参加した人数は数十人であり、キャンペーンが浸透していないことがわかる。このキャンペーンが成功するか、否かでは富良野市の今後に大きな影響を及ぼすと考えられる。現在、進められている試みとしては、富良野市やその他の市町村のイベントやキャンペーンに参加するような形が多い。

今後の事業の課題としては、まず、このキャンペーンを全国的に知ってもらう必要がある。より多くの人に参加してもらうことで、富良野市の魅力を伝えることができるとともに、必然的に定住を希望する人が増えるであろう。また、若年層人口をしっかりと雇用できるような環境を整える事が必要であると考えられる。この事業が成功することは富良野市にとって大きな転機になることは言うまでもない。そして、富良野の雄大な自然に大きな新たな可能性を生むことになるであろう。

表 4-1. 「ふらの・びえい人になるキャンペーン」の富良野市のイベント

イベント名	期間
ヘソダルマコンテスト	2006 年 2 月 1 日～28 日
富良野エリアバス	2006 年 2 月毎金・土・日曜日
ふらののかれー食べ歩き	2006 年 2 月 22 日
「北の国から」ロケ地スノーシュータクシー	2005 年 12 月 23 日～2006 年 3 月 31 日
スノーフェスティバル寒々村	2005 年 12 月 23 日～2006 年 2 月 26 日
厳寒ふらの体感ツアー	2006 年 2 月 1 日～28 日

4-2. 長野県菅平型 スポーツによるまちおこし

長野県には、スポーツのメッカ菅平高原がある。ラグビーはもちろんの事、サッカー、陸上、テニス、マレットゴルフ、バスケットケットボール、バトミントン、バレーボール、ゴルフ、MTB、スキー、登山、フィッシング、オリエーティング、パラグライダー、ネイチャーゲームなどあらゆるジャンルのスポーツ施設が充実している。特に、ラグビー、サッカー、アメフト、陸上は合宿誘致を積極的に行なっており、図 4-1. からわかるように 2001（平成 13）年には、ラグビー829、サッカー212、アメフト 10、陸上 167 チームの合宿を誘致している。菅平は年々、グラウンド数を増加させるなど、工夫、努力し続けることで、スポーツのメッカとして長い間、全国的に名を轟かせている。また、観光客入込客数の確保についても力を入れており、図 4-3.からは、全国的にも不況や海外旅行人気により、観光事業の停滞がささやかれている中、冬は減少しているものの、夏の観光客数を安定して確保し、年間を通して多少微減ではあるものの大きな減少を避けているということも高く評価することができる。

富良野市も「合宿のまち」として可能性を見出す事は出来ないだろうか。地域的特性から考えてみても、良質な雪質を誇るスキー場を持つこと、また、雄大な自然があることなど酷似している。また、夏場の気温は菅平と同様に非常に合宿を誘致するに最適な気候であるといえる。

また、図 1-2. 図 4-2. から読みとることができるように富良野市と菅平の産業別人口は酷似していることがわかる。産業別人口では、どちらの地域も第 3 次産業別人口が 1 番高く、（全体における第 3 次産業人口割合、富良野市 59,3%、菅平 45%）富良野市・菅平ともに農業のまちから新たな可能性として観光業に力を入れていることがわかる。このことから菅平では、スポーツによる雇用の創出が成功していることがわかる。

北海道にも合宿誘致に乗り出している自治体は少なくない。夏場では、古くからラグビーのまちとして発展してきている北見市、充実した施設を持つ津別町、また、炭鉱が閉山して活気を失ったまちに活気を取り戻そうと合宿誘致に乗り出している夕張市などがある。冬場では、パウダースノーで有名なニセコ町、スキージャンプ、クロスカントリーに力を入れている下川町、朝日町などが挙げられる。それぞれの市町村ともに、過疎化が進むま

ちに大きな経済効果や活気をもたらそうと努力している姿が見られる。北海道は夏涼しく、冬は充実したウインタースポーツをすることができるということで本州からの合宿チーム・団体は後を絶たない。そこで、富良野市も新たなまちおこしの可能性として「合宿誘致」を進めて行くことは極自然なことではないだろうか。

先に述べているように、北見市、津別町、夕張市、ニセコ町、下川町、朝日町などは独自のスタイルで「合宿誘致」に力を入れている。富良野市が「合宿誘致」の乗り出した際にこれらの市町村に引けを取らない大きな魅力がある。それは、交通の面である。ここで、取り上げた市町村は、それぞれ、1番近い空港に降り立ってからも数時間掛かる場所にあるが、富良野市は旭川空港から1時間弱で到着する事ができる。このことは貴重な合宿の時間を有意義に使うといった面から考えてもかなり大きな魅力となると考える。

夏場にはサッカーやラグビーを行うことができるグラウンドがないことは、長引く不況によって離農を余儀なくされた農家の手放していった荒廃された土地が点在しており、この土地を上手く整備し活かすことで、富良野の大地に新たな可能性を見出す事ができるのではないだろうか。

富良野市を「合宿のまち」とするためには、自治体の不断の努力が必要であるといえる。自治体に期待する地域住民も少なくない。自治体が、地域の発展のために立ち上がったときに、創めて「脱・北の国から」のまちとして、新たな大きな一歩を踏み出し、新たな自治体のスタイルとして全国的に名を轟かせるに違いない。

図4-1、ラグビー・サッカー・アメフト・陸上合宿の推移

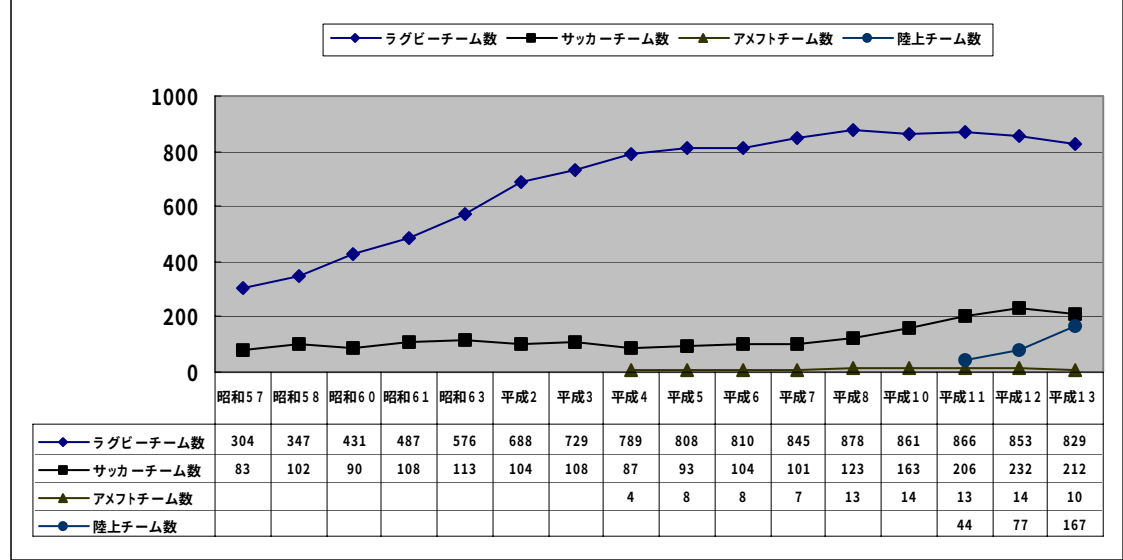


図4-2、長野県菅平産業別人口推移

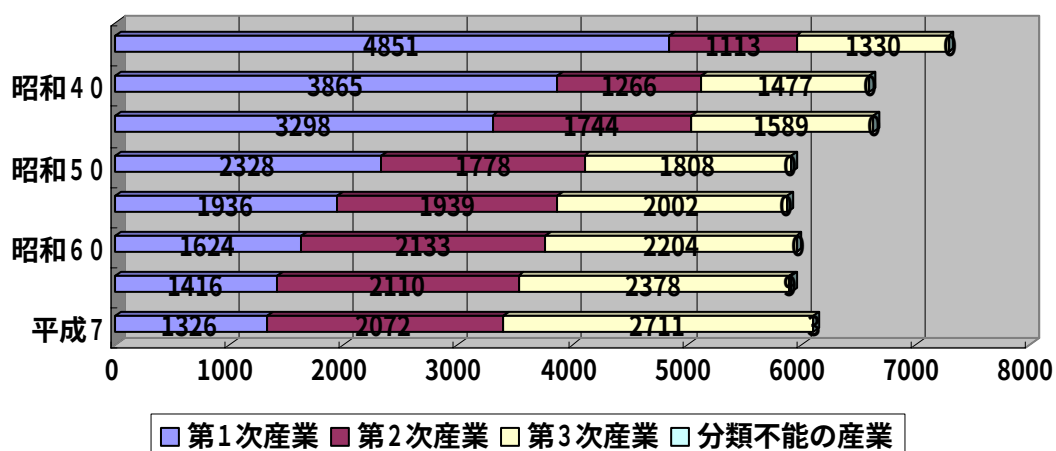
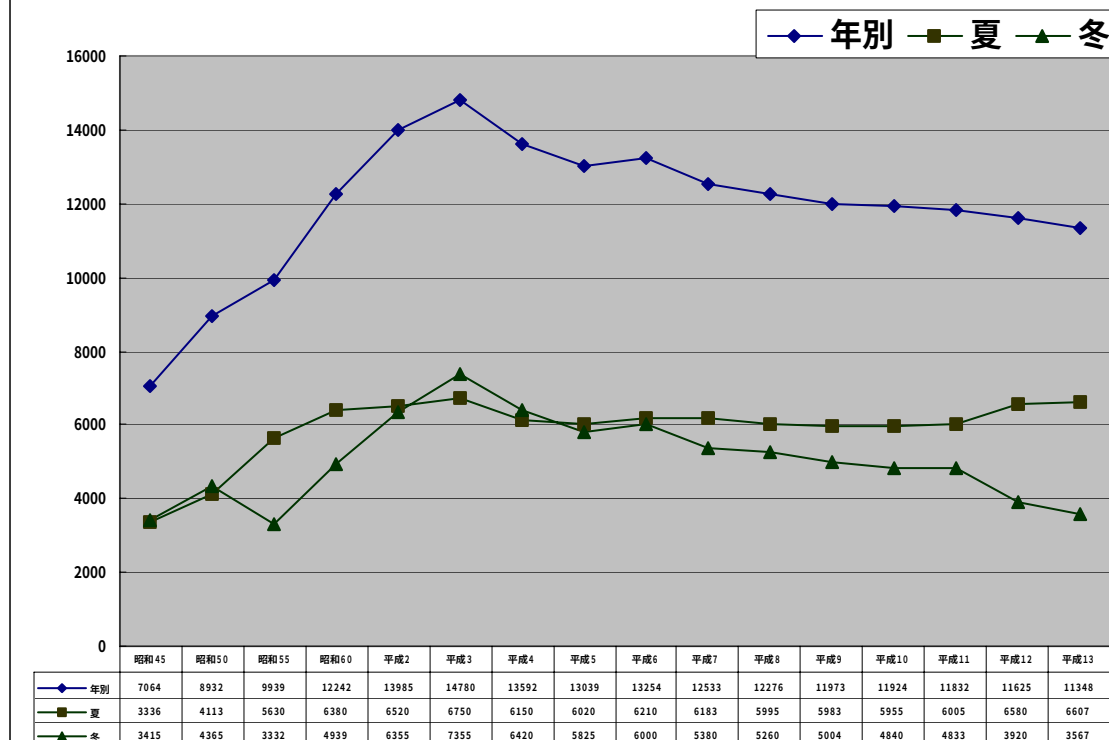


図4-3、菅平高原観光客の推移



5. 研究の成果と今後の課題

研究の成果として、富良野市の歴史を振り返るとともに、多角的見地から新たな産業の可能性について考察することができたと感じている。定住者の呼び込み事業に関しては現在、軌道に乗っているとはいえない状況であるものの、今後のアプローチの手段、事業の工夫によっては多大な可能性を秘めていると感じる。例えば、アプローチの手段として、国内だけの募集に留まらず、世界的に定住者を募集することや定住してきた人々で経営する農場などができれば、定住希望者も増え富良野市の主要な産業に成長する可能性が大いにあると考えられる。また、富良野市でのスポーツによるまちおこしでは、日本を代表する合宿のまち、長野県菅平との比較においても酷似している部分が多くあり、スポーツによるまちおこしは、ドラマ「北の国から」の終焉による観光客離れに歯止めをかけるとともに雇用の場も創出することができ、壮大な事業になると考えられる。今回の研究では考察することができなかったのだが、未だに富良野の大地には大いなる可能性が眠っている。富良野の魅力についてこれからも研究を重ねていく。

また、今後の課題としては、富良野市をはじめとして、日本の多くの市町村を取り巻く問題を感じとることができた。対策としては、自治体がその地域の資源や特徴などを多角的に研究し、独自の対策を練ることが重要である。もちろん対策の選択肢の1つとして、近隣自治体と協力する事業形態というものも必要になってくることはいうまでもないが、現代のグローバル社会の中で世界に目を向け事業を実践していくことも注目されていくであろう。

富良野市の今後に目を向けると、大きく3つの課題が挙げられる。

- ① 雇用環境を整備する。
- ② 自治体が積極的に関わる事業展開を確立する。
- ③ 観光客中心のまちおこしではなく、地域住民のためのまちおこしを進める。

雇用環境を整備することは、過疎化が進行しているまちにとって早急に対策しなければならない課題であり、富良野市もその例外ではない。若年層の雇用の場がないということは、若年人口の都市部への流出を招くことはもちろん、次世代の担い手を確保することができないことになる。地域の未来を守るためにも早急な解決策が望まれる。このことは、富良野市でも今後の大きな課題であり、将来的に定住者の呼び込み事業により人口の安定、また増加を図ろうと試みている自治体としては、雇用の場が少なすぎる。富良野に企業を誘致することや新たな産業を創出することなど、早急な雇用環境対策が必要とされている。

また、富良野市では今まで述べてきたように自治体発の産業が少ない。主要産業とされるものの中では、「ふらのワイン工場」「北海へそ祭り」が挙げられるが、観光客も年々減少傾向にある富良野市にとって、これからは、自治体が積極的な「まちおこし」「まちづくり」を展開していくことが望まれている。数年前には、自治体が中心となり、富良野市山部に、プロ野球球団を呼べる球場をつくらうという志しのもと、数億円も掛け野球場の建設を行

った。球場が農地の中にあり、ナイター設備を完備していることから、日照時間の関係で作物に大きな影響があるのでは、と困惑している農家の人々もいる。また、総工費が途中で予算を上回ってしまい、結果的にプロ野球球団を招いて試合を行うことができる規定を満たせないまま完成したことが、十分な調査・検討がなされていなかったのでは、と多くの住民の批判を受けている。富良野市は、これらの批判を真摯に受け止めるとともに、今後活かしていくべきである。これからは自治体自身が住民の立場に立ち、地域がより活性化していく「まちおこし」事業展開をしていく必要がある。

最後に、「まちおこし」「まちづくり」事業はあくまでも地域住民のためのものでなければならない。大きな建物を建設することが本来の「まちおこし」「まちづくり」の姿ではない。住民がその地域で豊かさを得、快適に暮らすことができる環境の整備などが本来の「まちおこし」「まちづくり」事業である。これからは観光客も従来通り大切にすることはもちろんであるが、地域住民のことを今まで以上に考えた自治体の在り方が望まれている。

おわりに

現在の社会は、インターネットの普及などにより情報が溢れている。家にいるだけで情報を得ることができるようになり、住民同士のふれあいが希薄となっている。また、住んでいる地域にすら関心を持たない人々も少なくない。特に都市部においては、このような状況が深刻となっている。そのような時代であるが故にこそ、地域住民の関心や興味をひく独創的な「まちおこし」「まちづくり」事業を展開する必要がある、事業によって地域の人々が共に関係を深め、交流を持つことができる場を自治体が提供していくことが望まれている。

独創的な「まちおこし」「まちづくり」を行なっていく上では、まず「ひとづくり」が大切となる。地域に関心を持ち、地域発展に対して強く興味を持つ情熱的な人材を育成していかなければならない。そのためには、教育の場においても積極的に地域教育を行い、地域に対して幼い頃から関心を持つことのできる環境づくりが必要となる。このことは将来の自治体の発展の意味からも重要なことになるであろう。また、地域住民を対象とした「まちおこしサミット」のようなものも大切になっていく。住民と自治体が話し合う場を設け、お互いに意見交換することができれば住民自身の地域に対しての関心を高めることもでき、地域発展のために大きな力となるであろう。地域を築いている人々は住民であること。住民が充実した生活を送ることができ、また、「おらがまち」に対して深い関心を持ち、積極的に「まちおこし」「まちづくり」事業に関わりを持つ。その姿を理想像とし、これからも地域振興について研究を深めていこうと思う。

参考文献

高橋延清，2004，『どろ亀さん、最後のはなしー夢をはぐくむ富良野の森づくり』，新思索社

北海道ふるさと新書編集委員会，2003，『「北の国から」北海道ふるさと新書』，北海道新聞社

フジテレビ「北の国から」制作スタッフ，2003，『「北の国から」への手紙』，アスコム
富良野市総務部総務課，2004，『富良野市統計書 平成15年度版』，富良野市総務部総務課

富良野市総務部企画振興課，1999，『富良野市総合計画2001／2010』，富良野市総務部企画振興課

老節布開基七十周年・平沢開基四〇周年記念協賛会，1987，『昭和六十二年十一月二十日開拓誌』，老節布開基七十周年・平沢開基四〇周年記念協賛会

倉本聡、島田和之，2002，『「北の国から」メモリアルアルバム』，フジテレビ出版
富良野クリエイティブシンジケート，1996，『「北の国から」ガイドブック』，フジテレビ出版

北海道ふるさと新書編集委員会，2003，『富良野市 北の国から発信するヘソ文化』，富良野市

守友裕一，2000，『内発的発展の道ーむらづくり，むらづくりの論理と展望ー』，人間選書 157

内田和浩，2001，『「自治体社会教育」の創造』，北樹出版